

Title	相互行為秩序を記述してゆくことの意味
Sub Title	
Author	浦野, 茂(Urano, Shigeru)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1997
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.2 (1997.) ,p.16- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集Ⅰ：社会学の方法とリアリティ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

相互行為秩序を記述してゆくことの意味

浦野 茂

1. 「秩序問題」に対する立場

いわゆる「秩序問題」なるものが社会学を中心に数多く問われてきた。これはおおむね社会的現実の成立のメカニズムを問うものといえると思う。この問題に対して、エスノメソドロジー・会話分析に基づく相互行為論がとる立場を大雑把に言えば次のようになる。まず往々に抽象的に定義されてきた「秩序」なるものを相互行為の秩序と読みかえる。そしてその相互行為の秩序を実践的に成し遂げられるものとみなしたうえで、それが成し遂げられてゆくしかたをそのレリヴァンスに忠実に記述してゆくというものである。そしてそれを行ってゆくさいに、次のことが前提となっている。すなわち、その相互行為の秩序がどういう秩序であるのか、いいかえれば何の場面であるのか、このことはその場面の参与者自身がそのおこないにおいてその場面に対してみてとれる (accountable) ようにしている、ということである。このことは、H.ガーフィンケルが「メンバーが日常の出来事の場面を作りだし維持してゆくところの活動は、その場面を「みてとれる」ようにするメンバーの手続きと同一である」と述べていることでもある (Garfinkel 1967: 1)。

任意の相互行為場面が何の場面であるかは、その参与者のおこないにおいてその場面においてみてとれるように成し遂げられているということ。なおこのことゆえに、相互行為場面は研究者にもみてとれ、それがどのように成し遂げられているのかを記述してゆくことができるわけである。そしてそのさい、参与者が「実のところ」何を考えてそのおこないをしたのかといった「隠された意図」などを、その記述に含み込む必要などはない。というのも、そうした意図など当の相互行為場面にとってもたいがいの場合レリヴァントなものとして現れてこないからである。ところで他方、言語行為論においては、個々の言語行為に関する構成的規則のひとつに「誠実性条件」なるものがあげられている。「依頼する」という行為に関していえば、その誠実性条件は「話し手は聞き手に…をしてほしいと実際に思っている」となる。つまり話し手はそれを行うという誠実な意図を持たなければそうした行為は成立しないということである。しかしながら(この点は強調しておきたいのだが)、ここでいわれる誠実な意図なるものは、相互行為場面において一定の行為として(たとえば依頼として)みてとれるおこないがなされているという事態から定義上生じてくる、相互行為上の期待のレベルに関わるものであり、それ以上のものではない。その意味でこうした条件の想定は余分なのである。

ともあれ、エスノメソドロジー・会話分析に基づく相互行為論のこうした関心から帰結する事柄は次である。すなわち、任意の相互行為場面を記述するにさいして、その場面に

対して物理的時空間上および因果論上の外部にあるとされる事柄の影響を考慮する必要はないということである。もちろん相互行為場面の外部がないと断じていない。そうではなくて、相互行為場面においてレリヴァントでないような外部の存在をもってそれを記述することを拒否してゆこうということなのである。そしてまた、相互行為場面の外部自体もまた、その相互行為にレリヴァントなしかたでそこにもたらされるはずだと考えるのである。

エスノメソドロジー・会話分析に基づく相互行為論のこのような立場に対しては典型的には次のような指摘、すなわち任意の相互行為場面を可能にしている隠された条件や歴史的視点総じて制度的コンテクストの欠落という指摘がしばしばなされている。それによれば、こうした立場は相互行為場面の外部の要因を等閑視しており、またそれゆえに「批判」という契機が失われているという。なおこうした指摘は、秩序問題に対する次のような方法上の立場をその背後にもっていると思われる。すなわち一般的に妥当する説明要因を設定し、それによって社会秩序を導出・説明できるとするものである。しかしである。たとえば「儀礼」という概念によって相互行為一般を説明できたと仮にして、相互行為が総じて儀礼的であるとするならば、何事かをその語の真正な意味で儀礼と呼ぶことの意味もなくなるのではないか。要するに、こうした一般的要因による説明は、対象となる相互行為が具体的に「何の場面」として成し遂げられているかという点を見失ってしまうことになるのである。

また上でみたような難点の指摘は外部の要因というものについての概念的混乱にもよるものとも思われる。そこでいわれている相互行為場面の外部なるものは、物理的時空間上および因果論上の外部であり、くわえて相互行為場面とは無関係な形で社会学者によって観察された外部であるといえる。しかしながら、先に述べた前提に基づけば、相互行為場面の外部というものの現実性自体、当の相互行為にレリヴァントなしかたで成し遂げられているはずだといえる。そして、それがどのような形で成し遂げられているか、そしてそのことで参加者は何を行っているのか、これらを記述してゆくことはひとつの有効な立場であると思われる。このことを、伝聞の物語を語るというおこないに関して以下で簡単に例示してみようと思う。伝聞の物語は、目下の話者が聞き手であったところのかつての場面、つまり目下の相互行為場面の外部における語り手の物語の引用の形をとりながら語られるものである。ゆえに目下の相互行為場面の外部への言及であるといえるだろう。

2. 外的コンテクストへの言及は何を行っているのか？

次のやりとりの断片をみてほしい。このやりとりは、佐渡島の人々の会話においてしばしば話題にあがるトンチボについての聞き取り調査におけるものである¹⁾。このトンチボなるものは動物であるにもかかわらず人間に変身して人を騙したりとり憑くなどする存在として昔話から伝説、身近な過去についての記述において当たり前のように佐渡島の人々

によって語られるという。個々の細かな点を述べることは省略するが、この調査場面は、調査者一人(U)とインフォーマント二人(AとB)の三者の間で行なわれたやりとりである。そしてこの断片は具体的には、トンチボについて体験の所在についてのUの質問に対して、AとBがそれぞれ自身(のみ)が主人公となる体験の物語を語った後の部分である。

[トランスクリプト2] (1A5)

81 B: ばあ、なにか知ったことあったらいうて聞かせて=

82 A: =もお(べつに)それぞれ以外にどういたこともねえしきあ(.5)

83 A: ひ、ひとが(いなあ)聞いたなんだから [いうてのお、

84 B: [うんうん

85 A: こないだも見たあ、おれが、おらあのおやが藪から(.5)

86 A: 藪って、草藪んなかから、やまのたもりにいって、歩いたって

87 B: うん

88 A: 溜池さ [あ、=あるだよ [

89 B: [うん= [うん=

90 A: =で家いったらちよっと気色わるうなって、

91 A: んでそんでシュウゾウばあさんがのお、

92 A: こそ、あの::: ショウジンばあがおったと [きだ、

93 B: [はあああ

94 A: おがみに来てみたちゅう [わ

95 B: [うん=

96 A: =そいたら、その、おれがトンチボが出たちゅうわ

97 A: おれがそのとこ通るおれがおのんのお、だまあーって通って、

98 A: ここ通してくれていやええのんを、だまあーって通して

99 A: へえて、おれを踏んだとか蹴ったとかした、でそれが腹が立つって=

100 B: =うん=

101 A: =で、それをまじないして、っすぐ、気色がよくなっ [た

102 B: [うん、

Bに促されてAは83行目で「ひとが聞いた」と明示して物語を語りはじめている。この点から、それに続く物語が「ひと」からAが聞いた物語であり、くわえてその「ひと」自身も、明示されていない何者かから聞いたものとしてAに語った物語であることがわかる。これはAによって語られた伝聞(の伝聞、つまり二重の伝聞)の物語りである。そして内容はおおむね次のようなものである。この明示されていない何者かの「おや」がやまの溜池に行き、帰ってきたところ、気分が悪くなった。そこで、おそらく祈祷師であると思われる「シュウゾウばあさん」が「おがんだ」ところ、「トンチボ」が憑いたことがその原因だったとわかる(97-99の部分は、口寄せにおける「トンチボ」の発話の引用である)。そこで彼女が「まじない」をしたところ、この「おや」の気分は回復したという。

具体的に検討するに先立ち、簡単な確認をしておく。会話において出来事を報告するときたいがいは物語の形をとる。そしてそれは強い意味で相互行為的に成し遂げられる現象

としてある。というのも物語の語り手が適切に語り手であるためには、その聞き手となる者から、その語り手となる者を会話内で一定の幅を持った物語の語り手としてみなしているものとみてとれるようなおこないを獲得することが必要となるからだ。それにくわえて、語り手は、彼または彼女によって語られる物語が当の場面において適切に「語るにたる」ものであることをもその場面に対して示さなければならない。なぜこの物語が、この語り手によって、会話のこの場面において語られるのか、これを聞き手にみてとれるように物語の語り手は語ることを行わなければならない（少なくともそうした期待がある）。要するに、会話において物語を語ることは、ただたんに語ることを行うのではなく、特定の場面のなかでそしてそれに対して（たとえば正当化や弁解などといった）何事かをみてとれるように行うことなのだ。ゆえに物語は、それについて語られているところの事柄そのもの（つまり物理的時空間上当該相互行為の外部と考えられるような事態）との関係においてではなく、会話という相互行為場面のひとつの指し手として考えられるべきなのである。

このことに基づけば、先の断片についても次のように問えるだろう。先に（省略した形であれ）述べたような場面においてそしてそれに対して、この伝聞の物語は何を行っていいのか、と。

具体的に示すことは省略したが、この断片以前の部分で、Aは自身のトンチボについての体験を語った後で、Bの同意を伴いながら「（トンチボというものは）そのように言うわ、聞かされとるわ」と述べている。ここではトンチボの体験が語られているのではなく、強いていえばトンチボという語ないし概念（の用い方）が目下のやりとりの外部にあるコンテキストを参照する形で、「説明」されている。なお何事かを、その狭い意味において「説明する」のは、ありうべき理解が欠如していたりそれが予想可能な場面においてである。ゆえにA（とB）の「説明する」ことのうちに、トンチボという語について不案内でありかつ知る必要のある情報収集者としてUを位置づけていることがわかる。

なお、これも例示することを省略したのだが、AとBのそれぞれの物語は、一人称単数の体験過去の物語という特徴をもつものとしてこの断片以前の部分で語られてきていた。こうした一人称単数の体験過去の受容可能性は、その物語における記述が（事実と対応しているかどうかではなく）それ自体において妥当なものとしてみなしうるか否かにかかっている。つまりそこで語られている体験の事実性は、その物語における記述の妥当性の成否しだいだということである。

以上の点からABとUの関係をみってみるならば、ABは自身らの物語の記述の妥当性についての承認をUに期待することはできないということがいえる。というのも、先に述べたように、ABはUをトンチボという語について不案内でありかつ知る必要のある者と位置づけていたからだ。それゆえAとBの各々の物語は、Uに対してはその事実性に関してとても弱いものとしてしか現れざるをえないということになる。くわえて、それぞれの体験の物語を語った後にAとBは、これまで語ってきたものの他にはトンチボについての体験

がないことを述べている。そしてその際、Uは61行目で「うーん」と呼応している。

[トランスクリプト1] (1A5)

59 A: おりゃあそれ以外見たこたね=

60 B: =おらも [それだけよ=

61 U: [う:ん

62 A: =見たこたね=

62 B: =おれおれお:: おらあそのとき見ただけ、どっ、

63 B: え、ト、トラバサミでとられた、とったとき見ただけ

こうした呼応のしかたは、ABの物語の妥当性についての潜在的なあやうさを含意するものとみてとれまいか。なぜならこの呼応は、AとBがそれぞれ一度だけしかトンチボを目にしたことがないということを中心化し、それゆえABそれぞれの物語の記述の妥当性もあやういものになることになるからだ。トランスクリプト2の部分で、AがBに促される形で伝聞の物語を語り始めるのはこうした場面においてなのである。

次に伝聞の物語が会話の中でもつことになるひとつの特質について確認しよう。伝聞の物語は、目下の話者が聞き手であったところのかつての場面—つまり目下の相互行為場面の外部—における、語り手の物語の引用の形をとりながら、語られる。その意味でそれは、目下の場面に対して、その外部であるかつての場面での物語を、そのコンテクストとして明示的に接合するものといえる。こうしたわけで、そこで語られているところのかつての語り手の態度とこの伝聞の物語の語り手との態度とを切り離すことが可能であるような形をとってそれは当の場面に現れうる。伝聞の物語がその内容に対する語り手の積極的関与を期待されないのはこうした理由によるのだが、伝聞の物語の語り手とかつての語り手とのこうした切り離しの可能性があるゆえに、反対にそれぞれの態度の合致を作り上げることで語り手は、その物語におけるかつての語り手の態度を自身の態度なり主張を支持するものとして扱うこともできるようになる。

以上述べてきたことに基づけば、トランスクリプト2での伝聞の物語が、それが語られる場面においてそしてそれに対して何を行っているのかをみてとることができよう。AとBはそれぞれが語った物語の妥当性に関して、Uの承認を期待することができなかった。それは彼らの体験の事実性をUに対して示す際の困難として現れ、ひいては自身らの情報提供者としてのあり方をも危うくするものである。さきの伝聞の物語が語られているのは、こうした状況の下でそれぞれの物語の妥当性を示すためのしかたとしてなのである。このことによって、Aはこれまで語られてきたAとBの各々の物語が、伝聞の物語におけるかつての語り手によって支持されていることを示すことになる。つまり、Aがこれまで言い聞かされてきた物語のうちのひとつに、自身らの物語を位置づけることを行っているのだ。そしてそれゆえ、それらを妥当なものとして聞かされているものと聴くことへの指図 (instruction) をUに対して行っているともいえるだろう。要するに、目下の相互行為場面に対して外的コンテクストとなる伝聞の物語が、目下の場面のAとB自身の物語に対して支持を与える

ような形で語られ、それゆえ社会的に受け継がれ共有されてきた物語のひとつとしての位格をそれらに与えることになっているのである。そしてそれと相即的に、AとBは適切な情報提供者であることができ、またこの一連のやりとりが「調査場面」として成し遂げられることにもなるのである。

3. 結語

以上で伝聞の物語を語るというおこないを例にとり、相互行為場面の外部を引き合いに出すことがどのような形で成し遂げられているか、そしてそのことで参加者は何を行っているのか、これらを確認してきた。これからわかることのひとつは、目下の相互行為場面に対して外部となる伝聞の物語を語るということ自体が、目下の相互行為場面のレリヴェアンスに志向した形でなされており、またその場面を一定の方向へと編成してゆくおこないの一片としてなされているということである。つまり、任意の相互行為の外部の事実は、それが事実であるから言及されるのではなく、それに言及することで何事かを行うがゆえに言及されるのである²⁾。そしてこの点はおそらく、相互行為の外部の「客観的」事実などをあらかじめ規定してその相互行為を記述・説明してゆく方法によっては、等閑視されてしまう事柄であると思われる。

註

- 1) この会話断片(1A5)は、1991年から1994年の間に梅屋潔氏(一橋大学大学院)によって行なわれた社会人類学的調査において録音されたものである。なおトランスクリプト記号は以下の通り。
 = →参加者間の言葉の途切れのないつながり [→参加者間の言葉の重なり開始
 … →引き延ばされた音 (.n) →n秒の休止
- 2) なお歴史哲学において物語論を展開しているH.ホワイトは、物語(narrative)一般に道徳的主張が含み込まれているという(White 1987: 33ff.)。具体的にいえば、歴史についての物語的記述が提示される争いという一定の政治的コンテキストにおいてこそ、物語化への欲求が生じてくるのだということである。こうした把握は、過去の出来事という現在のコンテキストから切り離された外部について物語ることあるいは物語を提示することが、現在のコンテキストにおいて何事かを行うことであるという本報告で確認してきた把握に通ずる限り、全く異論はない。にもかかわらずそれを物語一般の特性として帰属させている点において、彼は物語というものを過度に物象視しているといわざるをえないと思われる。

文献

- Garfinkel, H. 1967. "What is ethnomethodology", in *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall.
 Goodwin, M. H. 1982. " "Instigating" : storytelling as social process", *American Ethnologist*, 9-4, pp.799-819.
 Sacks, H. 1992. *Lectures on Conversation*, Vol. I & II, Blackwell.
 White, H. 1987. "The value of narrativity in the representation of reality", in *The Content of the Form*, Johns Hopkins U.P., pp. 1-25.

(うらのしげる 慶應義塾大学大学院法学研究科)